第７課　イエスは人々の幸福を願われた

【暗唱聖句】

「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった。」マタイ23:37

【今週のテーマ】

今週は教会の定義の一つとして、自分たち以外の者のために教会は存在しているということを考えます。

【日曜日　ニネベにおけるヨナ】

「神は彼らの業、彼らが悪の道を離れたことを御覧になり、思い直され、宣告した災いをくだすのをやめられた。ヨナにとって、このことは大いに不満であり、彼は怒った」ヨナ書3:10～4:1

ヨナは自分たちを苦しめていたニネべの住人が神の裁きにあって滅びてしまえば良いと心の中で思っていたのでしょう。だから、彼らが悔い改めて悪の道を離れ、神様が災いを下すのを思いとどめられたとき、喜ぶのではなく不満に思ったのです。しかし、そのようなヨナに対して神様は「お前は怒るが、それは正しいことか。」（ヨナ4:4）と言われます。神様はすべての人々をお救いになりたいと望んでおられます。それはわたしたちの迫害者に対してもそうです。しかし、わたしたちは自分を苦しめる人々が神様から救われるのを見て、喜ぶことができるでしょうか。ヨナの物語は神様の愛の広さ、大きさを伝えるのと同時に、ヨナがいやいやながらも、苦労しながら、神様の働きを通して、神様の愛を学ぶ訓練を受けている姿を見ることができます。近隣社会に対して、神様の働きをするのは、彼らを救いに導くためだけではなく、その働きを通して、私たち自身が神の愛を知り、神の子として成長していくためなのです。

イエスのエルサレム入場

「イエスがオリーブ山の下り坂にさしかかられたとき、弟子の群れはこぞって、自分の見たあらゆる奇跡のことで喜び、声高らかに神を賛美し始めた。19:38 「主の名によって来られる方、王に、／祝福があるように。天には平和、／いと高きところには栄光。」ルカ19:37、38

イエスがロバの子に乗って、エルサレムに入場されたとき、弟子の群れはこぞって主をほめたたえ、声高らかに讃美します。しかし、イエスはその讃美の声に気分を良くするのではなく、エルサレムが近づくにつれて、その都のために涙を流されたのです。その理由は、平和の道をまるで彼らが理解できないでいたからです。

「イエスはその都のために泣いて、19:42 言われた。「もしこの日に、お前も平和への道をわきまえていたなら……。しかし今は、それがお前には見えない。19:43 やがて時が来て、敵が周りに堡塁を築き、お前を取り巻いて四方から攻め寄せ、 19:44 お前とそこにいるお前の子らを地にたたきつけ、お前の中の石を残らず崩してしまうだろう。それは、神の訪れてくださる時をわきまえなかったからである。」ルカ19：41～44

イエスは人々が平和への本当に道を、救いへの本当の道を知らずに、イエスのエルサレム入場を称えている姿を見て、涙を流されました。イエスの関心は常に、多くの人の行く末でした。自分のこと以上に、他者のことを思いながら生きていました。このことが、ヨナには決定的に欠けていました。

またわたしたちも、イエスを信じると言いながらも、本当の平和への道を知っているでしょうか。その道が見えているでしょうか。イエスの流された涙を、自分たちのこととして、とらえなければなりません。平和への道、それはただ主、イエス・キリストの十字架という愛によって築かれた道のみであり、それがわたしたちを真の平和へと導きます。

【月曜日　「とにかく」の原則】

イエスはそうすることによって様々な問題が起こりうることを承知しながらも、「とにかく」あるいは「にもかかわらず」、人々を癒されたり、赦されたりなさいました。これは自分のことよりも、常に人の幸福を第一に考えておられたためです。ここにわたしたちが学ばなければならない教訓があります。

「無知と罪の鎖につながれて滅びようとしている幾百、幾千万の魂が、彼らに対するキリストの愛を聞いたことさえないのである。もし、われわれと彼らの立場が入れ替わったとしたら、われわれは彼らにどうしてもらいたいと望むだろうか。我々は自分の力の及ぶ限り、そうしたことをすべて彼らのためにする最も厳粛な義務がある」各時代の希望下巻112ページ

マタイ5:43～47に敵であるにも関わらず、愛し、祈りなさいと教えられていますが、それは神ご自身の品性と同じであり、そのように生きる者は神の子となることが書かれてあります。

「しかし、あなたがたは敵を愛しなさい。人に善いことをし、何も当てにしないで貸しなさい。そうすれば、たくさんの報いがあり、いと高き方の子となる。いと高き方は、恩を知らない者にも悪人にも、情け深いからである」ルカ6:35

【火曜日　愛は必ず】

イエスの最も大切な教えは明確です。それは神を愛し、隣人を愛することです。そして、わたしたちの愛を必要としている人はすべて隣人であることも教えられました。ところが、クリスチャンの愛の欠如が、人々をイエスキリストから遠ざけてしまっていることがあるかもしれません。一般の人々の中には、中世の十字軍や現代の圧倒的な軍事力を持つキリスト教国が、数々の戦争をひき起こしていると思っている人がいます。それは必ずしも正しくはないのですが、そのような印象を与えてしまっていることは確かです。また、より身近な例では、教会に対する愛の要求がとても大きくて、それに答えられないときに、深い失望を与えてしまうことがあるかもしれません。

どんなに大きな信仰があっても、どんなに立派な信仰的な行いをしても、もし愛がなければすべては空しく、意味がないと聖書は言います。それは本当に強い調子で述べられており、無視することができないものです。では愛するとは具体的にどういうことでしょうか。聖書は次のように教えています。

「13:4 愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。 13:5 礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。13:6 不義を喜ばず、真実を喜ぶ。13:7 すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える」第一コリント13:4～6

愛という言葉を「私は」と置き換えて読んでみましょう。しっくりくるでしょうか。このような愛の人となれるように、いつも祈りの中で覚えていくと良いでしょう。

【水曜日　二度目の接触】

「8:22 一行はベトサイダに着いた。人々が一人の盲人をイエスのところに連れて来て、触れていただきたいと願った。8:23 イエスは盲人の手を取って、村の外に連れ出し、その目に唾をつけ、両手をその人の上に置いて、「何か見えるか」とお尋ねになった。8:24 すると、盲人は見えるようになって、言った。「人が見えます。木のようですが、歩いているのが分かります。」8:25 そこで、イエスがもう一度両手をその目に当てられると、よく見えてきていやされ、何でもはっきり見えるようになった」マルコ8:22～25

ここに盲人の目が見えるようになる奇跡の物語が記されています。興味深いのは、目に唾をつけ両手をその人の上において「何か見えるか」と癒しの御業を行われたことと、一度では完全に見えなかったので、もう一度目に両手を置いて癒さたことです。

目に唾をつけて目の治療を行っていたことが古代の資料に出てくるようですが、何も見えない盲人に対して、いま主が何をなさっていることをわからせ、その信仰を働かせるために、このような目に唾をつけ、目に触れて、癒しを行ったのかもしれません。

一回目の癒しでは、人が木のように見えました。これだけも驚くべきことですが、完全に見えるようになったわけではなかったので、もう一度イエスは両手を目において当てられます。すると、今度ははっきり見えるようになります。この場面には霊的な教訓があります。イエスはこの出来事の直前に弟子たちに対して「目があっても見えないのか。耳があっても聞こえないのか」マルコ8:18と言われています。目があっても神の真実が見えない霊的盲目というのがあります。わたしたちはもっとはっきりと霊的な目が開かれたなら、神の愛がもっとよく見えるようになることでしょう。そのためにはもう一度、イエスに触れていただく必要があるのです。

【木曜日　他者中心の教会】

「めいめい自分のことだけでなく、他人のことにも注意を払いなさい。互いにこのことを心がけなさい。それはキリスト・イエスにもみられるものです」フィリピ2:4、5

聖書は自分のことだけなく、他人のことにも注意を払いなさい、心をかけなさい、キリストもそうだったと教えています。サマリアの井戸でのどの渇きを覚えていたイエスは、自分ののどの渇きも忘れて霊的渇きを覚え、救いを必要としていたサマリアの女に声をかけられました。また、死にかけているヤイロの娘のところに行かれる途中、長血を患っていた女性に中断されてしまいますが、肉体の命以上に、霊的魂の救いを必要としている人のために計画を中断されました。ここに神の優先順位を見ることができます。自分のことよりも他者のことを、この世の必要よりも霊的な必要が優先されるのです。教会には様々な計画があります。それは大切なことですが、もし急きょ、より優先順位が高いことが生じたとき、計画を中断する勇気が必要です。

また、バプテスマへと導くことは教会の最も大切な働きの一つですが、愛の行為はさらに重要です。ガイドに書かれてある炊き出しを行っていた教会が、それをやめる理由がバプテスマが出ないからだというお話しはわかりやすい例話です。彼らは、そもそもいったい何のために炊き出しをしていたのでしょうか。